

# 佐賀県東部の浮立と祭礼

## ——三養基郡みやき町を例として

Furyu and Festivals in Eastern Saga Prefecture:  
Case Study of Miyaki Town, Miyaki County

谷 山 ことね

Kotone TANIYAMA

(日本女子大学大学院人間社会研究科 相関文化論専攻 博士課程後期一年)

### 要 約

現在の佐賀県、長崎県を中心とする旧肥前国地域には、浮立と称される民俗芸能が多数分布している。全国的には風流と表記され、祭礼を華やかに彩る作り物や群舞が特徴だ。浮立は風流の中では太鼓踊りに分類され、更に九種類ほどの芸態に分けられる。

佐賀県東部では、特に行列浮立や鉦浮立と称されるものが多数見られる。行列浮立は参勤交代の大名行列を模したものとわれ、行列で町を練り歩く形態をとる。先行研究では類似した芸態が多く分類が難しいことが指摘されており、今まで注目されることは少なかった。

本稿で扱う佐賀県三養基郡みやき町には肥前一宮である千栗八幡宮が位置し、古くから軍事や交通の要衝として重視された。現在は町内の六社に浮立が継承されているが、その研究のほとんどが市町村や教育委員会の民俗芸能調査に留まっている。本稿では特に近世寺社史料を中心に、当町の浮立や祭礼の姿と、その展開を明らかにすることを試みる。

### [Abstract]

“Furyu (風流)”, also known as “Furyu (浮立)” in Kyushu, is one of a traditional dances in Japan, especially in the area centered on the former Hizen Province in Kyushu.

In Hizen Province (present-day Saga prefecture and Nagasaki prefecture), a lot of types of Furyu dances are inherited in many shrines and those are divided into nine types.

Six shrines in Miyaki town, Miyaki county, Saga prefecture, have inherited Furyu named “Gyoretsu-furyu (行列浮立)”.

“Gyoretsu-furyu” is a procession modeled after the daimyo’s procession held during the Edo period. It is thought that the procession was included in the festival around the mid-1600s because of its splendid costumes and equipment.

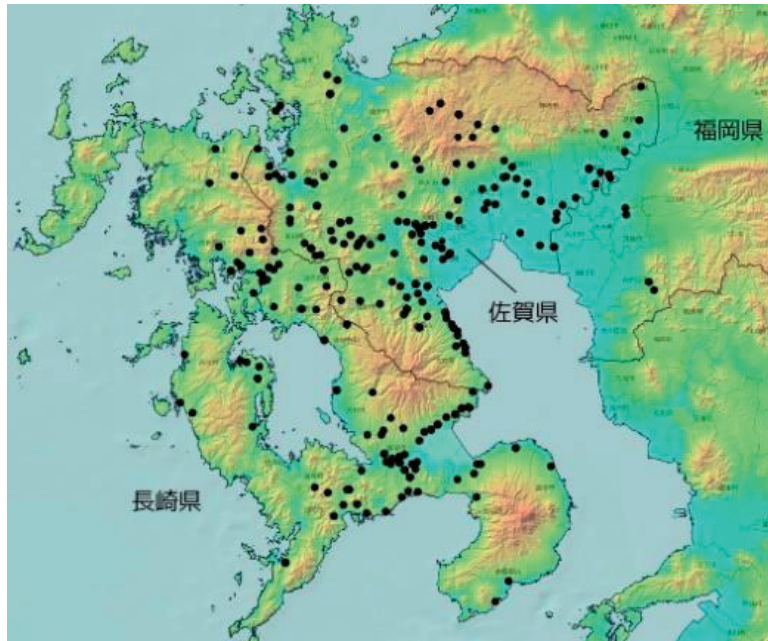
Today, shrine parishioners paraded through the town to the accompaniment of some musical performances.

Analysis is based on the previous research as well as documents relating to temples and shrines in the early modern era.

### はじめに

全国的に風流と称される民俗芸能が継承されている中、北部九州地方、特に佐賀県、長崎県、福岡県の一部では「浮立」という表記が分布している(図一)。旧肥前国に属する佐賀県では特に、県内民俗芸能の約七割が浮立と称されるほど濃密に分布しており、九州地方に多い神楽が一件のみである点が特徴だ。「浮立」という字は人や神の心が浮き立つことに由来するといわれ、およそ九種類の芸態に分類される(表一)。また、その分布には地域差があり、本論で主に扱う佐賀県東部では行列浮立や鉦浮立が多く見られるものの、佐賀市郡を中心とした地域には天月と呼ばれる被り物を身に付けて舞う天衝舞浮立が多く継承されている。また、県南西部を中心とする地域では、鬼面を身に付けて群舞

図一 浮立分布図（筆者作成）



地理院地図 URL: <https://maps.gsi.go.jp/>

する面浮立の分布が多い。  
現在は「民俗芸能」として扱われる浮立だが、近世には雨乞や祈禱の願成就、神社のお供日といった祭礼の中で行われてきた。そのため、元来は民俗芸能というよりも、祈禱や神事としての側面が強かったことが推測される。多様な浮立を研究することで、民俗芸能というカテゴリを再考する端緒とすることができるのではないだろうか。

表一 浮立の芸態（筆者作成）

浮立の芸態	特 徴
行列浮立	江戸時代の大名行列を模したものが多く、行列で練り歩く形の浮立。道具を投げ合うといった曲芸的な要素も含まれることがある。
舞浮立・踊浮立	演劇的要素が強く、舞や踊を中心とした浮立。演目が決まっており、それに応じた舞や踊を奉納する。
面浮立	鬼の面を被り、面を被る人々は小太鼓を胸に掛け群舞を行う。主に鹿島市や佐賀県南西部で行われている。
一声浮立	皮浮立・太鼓浮立とも。能を起源とすると考えられており、囃子や太鼓が中心の浮立であることが多い。
鉦浮立	鉦が中心で多数の鉦を使うことが特徴。舞や踊が含まれないもの。
玄蕃一流（天衝舞）浮立	弘治2年(1556)に堀江神社の神職・山本玄蕃が始めたとされ、「天衝」と呼ばれる鍬形の冠を舞手が身に付ける。
獅子浮立	獅子舞が含まれる。獅子の顔が扁平なものを使う地域もあり、雌雄2匹の獅子が登場することが多い。
武士浮立	袴を身に付けるなど武士風の衣装で奉納される。現在継承されているのは唐津市厳木町の広瀬浮立のみ。
動物浮立	猿や猪など、獅子以外の動物が登場する演目が含まれている。

そこで本稿では、佐賀県東部に位置するみやき町の例から、当地域における浮立の発生と展開、特徴について検討する。みやき町は近世を通じて佐賀藩に属しており、現在は肥前一宮の千栗八幡宮をはじめとする町内六社にて浮立が継承されている。従来あまり注目されてこなかった当町の浮立について分析することで、その芸態だけではなく浮立と神社、藩政との関係を明らかにすることを試みる。

## 第一章 みやき町の概要と沿革

佐賀県東部に位置する佐賀県三養基郡みやき町は、二〇〇五年に北茂安町、中原町、三根町が合併したことで誕生した、総面積五一・八九平方キロメートル、人口約二万五千七百人を擁する町である。東部は鳥栖市、南部は福岡県久留米市、北部は福岡県筑紫郡那珂川町、西部は上峰町、神埼市、吉野ヶ里町に隣接している（図二）。当町の北部は脊振山地が中心を占め、ここを源とする寒水川や切通川などの河川は、丘陵地帯や田園地帯を横切つて筑後川へと注いでいる。そのため、中部に至ると一〇〇メートル未満の丘陵地や段丘、低平な平地が中心となり、南部は河川が南北に縦断していることから、灌漑や排水、交通路、飲料用水の取水地として活用され、往時の堀が数多く張り巡らされている。特に低平な地が多い南部は、古くから川の増水や有明海の満潮による逆流水による氾濫、台風による風水害が多い地域であった。そのため、寛永年間（一六二四～四四）には成富兵庫成安（一五六〇～一六三四）によって千栗土居が築かれ、水害防止の一助と

図二 みやき町の位置（筆者作成）



地理院地図 URL: <https://maps.gsi.go.jp/>

して活用されてきた。

天平四年（七三二）以降の数年間に成立したと考えられている『肥前国風土記』によると、肥前国には東から基肆郡・養父郡・三根郡・神埼郡があり、三根郡には物部郷・米多郷・漢部郷の三郷を含む六郷があった。また、承平年間（九三一～九三八）の成立と考えられている『和名類聚抄』には、千栗郷・物部郷・米多郷・財部郷・葛木郷の五郷が記

され、同書の五郷と『肥前国風土記』に登場する漢部郷を併せると六郷となる。また、『肥前国風土記』には漢部郷の地名の由来として、来目皇子が新羅を征伐するための兵器を作らせた逸話が記されている。そして、その話を裏付けるように、旧中原町綾部地区（現みやき町原古賀）の東北に位置する香田遺跡にて、鍛冶遺構が検出されている<sup>10</sup>。また、三根郡では平安時代より宇佐八幡宮を始めとする荘園が設置され、各地に神社の勧請が行われた。

鎌倉時代には荘園の解体が進み、文永・弘安の役（一二七四年（文永十一）と一二八一年（弘安四））、いわゆる元寇が勃発した。特に戦地となつた北部九州地方では、元軍との交戦に備えて沿岸の警固や防塁の築造が行われた。また、「神風」が元寇の勝利をもたらしたとする信仰は神功皇后の三韓説話と結び付き、「異国降伏の神」としての八幡信仰が流行した<sup>11</sup>。特に延慶元年（一二〇八）から文保二年（一一三二）頃に

成立した『八幡愚童訓』には、筑前宮崎宮や筑後高良社などと共に、肥前河上社（現佐賀市大和町大字川上の興止日女神社）が登場する。このような八幡説話の成立は、八幡神とその母・神功皇后、妹・玉依毘売、神功皇后に力を貸した高良玉垂神といった神々の権威を高めると共に、それらの神々を祀る各寺社の崇敬へと繋がっただろう。また、建徳元年（一一三〇）に制作された大善寺玉垂宮所蔵の「絹本着色玉垂宮縁起」（国指定重要文化財、二幅）、室町期に制作された高良社所蔵の「絹本着色高良大社縁起」（福岡県指定文化財、二幅）、戦国末期に制作された千栗八幡宮所蔵の「千栗八幡宮縁起絵」（佐賀県指定重要文化財、二幅）はいずれも二幅で構成され、そのうち一幅には「神功皇后三韓征伐」の故事が描かれている<sup>13</sup>。また、他の一幅には神社境内や八幡信仰に基づく縁起などが描かれ、高良玉垂宮―大善寺玉垂宮―千栗八幡宮という

縁起の系譜が指摘されている<sup>14</sup>。また、この系譜について『北茂安町史』では、「一四世紀前半以降の八幡信仰は、地域を超えた共通の基盤を持っていた」ことが言及されている。このような背景により、千栗八幡宮が位置する現みやき町周辺においても、同様の信仰が共有されていた可能性があるだろう。

南北朝期は、観応の擾乱により混乱した時代となつた。一三三〇年代後半から四〇年代は探題一色氏と征西將軍方の菊池氏の対立が中心となり、五〇年代前半は足利尊氏の長子・直冬が少弐氏と共にこの対立に加わつたことで、三巴の対立となつた。また、直冬が九州を出た後、五〇年代中頃は菊池氏と少弐氏が協力して一色氏を九州から放逐したが、その後袂を分かち、筑後川の戦いが行われた。そして、この決戦での勝利により征西將軍方は大宰府を押さえ、六〇年代は南朝側が優勢となつた<sup>16</sup>。

また、『九州治乱記』には、建武三年（一三三五）に多々良浜での菊池氏（南朝方）との争いで勝利を収めた足利尊氏が、九州の宮方に対する守護を目的に、綾部城と千栗城に兵を置いたことが記されている<sup>17</sup>。この記述から、南朝方の勢力を抑える一つの軍事拠点として、博多に近い綾部城や、筑後川沿いの千栗城<sup>19</sup>が重視されていたことがうかがえる。また、南北朝時代の勢力は、一色氏から足利直冬、そして征西將軍方へと目まぐるしく変遷したため、在地武士たちの安定した所領経営は困難であつたと推測されている<sup>20</sup>。

そして室町時代には、肥前の在地武士が半済により寺社領を侵害したことが、みやき町西島の光浄寺所蔵文書から分かっている。半済とは室町時代の兵糧米を現地調達するための仕組みで、内乱による軍費を調達するために、室町幕府が寺社・本所領家・国衙領の年貢の半分



を武士に与えるようにしたものである。<sup>22</sup>当初は一年を期限とし、文和元年（一三五二）に始められたが、全国に拡大するとともに無期限で行われるようになり、半済を与えられた武士たちは、寺社領などを侵害していった。<sup>23</sup>各寺社は、領地からの収益が折半になるだけでなく、知行するもう半分の領地までも侵害されることがあったため、探題に訴えて解決を図ろうとした。<sup>24</sup>光浄寺の場合は、少なくとも応安六年（一二七三）以降は半済による寺領侵害が行われ、当時の九州探題・今川了俊（一二二六～一四二〇）へ訴えられた。<sup>25</sup>また、了俊は脊振山東門寺領においても、康暦二年（一二八〇）に半済を禁じている。<sup>26</sup>しかし、享祿三年（一五三〇）に東門寺宗徒が半済の撤廃を願い出た際に、当時肥前にまで勢力を拡大していた周防大内氏の奉行は「半済の事は惣国の御準據たるの条、先ず以て申すには及ばず候<sup>27</sup>」と書き与えている。つまり、領国内全土で半済が行われているため、廃止するわけにはいかないというのだ。そのため、この頃までには「おそろく最早、半済を行なう必要のないまでに、それらの莊園は武士の侵略を受けていたのである<sup>28</sup>」と考えられている。

また、戦国期には、肥前龍造寺氏の勢力拡大や豊前大友氏との争乱などにより、肥前をはじめ九州で戦乱が続いた。その中で、龍造寺氏の重臣であった鍋島直茂は、天正十二年（一五八四）に龍造寺氏の領国支配を委任される。そして、天正十五年（一五八七）に豊臣秀吉が九州平定と国割を行ったことで、龍造寺佐賀藩が成立した。その後、龍造寺政家と高房が死去したことにより、慶長十二年（一六〇七）に佐賀鍋島藩が成立し、養父地方の一部と三根・神埼・佐賀・小城・西松浦・杵島・藤津の各郡を幕末まで領有した。

江戸時代の現みやき町域は佐賀本藩の三根郡に属し、六郷四八ヶ村に

分けられ統治された。<sup>29</sup>寛政期（一七八九～一八〇〇）と享和期（一八〇一～一八〇四）を始めとする多くの郷村帳では、次のように記されている。<sup>30</sup>

綾部郷	十ヶ村	香田、蓑原、姫方、綾部、原古賀、寒水、高柳、屋形原、船石、堤
千栗郷	九ヶ村	千栗、石貝、白壁、豆津、大島、江口、東尾、西尾
坊所郷	九ヶ村	中津隈、板部、下津毛、坊所、前牟田、米多、寺家、市橋、江越
西島郷	五ヶ村	江迎、九町分、田島、田中、西島
矢俣郷	五ヶ村	天建寺、南島、浜田、納江、坂口
下村郷	十ヶ村	市武、江見、寄人、続命院、和泉、大坂間、東津、松枝、向島

ただ、隣接する養父郡と見なされる地域もあり、明治には綾部郷、千栗郷、坊所郷の一部が養父郡となった。そして、明治二年（一八八九）の町村制施行により、中原村、北茂安村、南成安村、三川村の四町が発足し、その後昭和三〇年（一九五五）に、南成安村と三川村が合併して三根村となった。そして昭和三六年（一九六一）には、三田川村（現吉野ヶ里町）から南里ヶ里地区が編入された。更に、昭和三七年（一九六二）に三根村、昭和四〇年（一九六五）に北成安村、昭和四六年（一九七二）に中原村にて町村制が施行され、三根町、北茂安町、中原町が誕生した。<sup>31</sup>その後、平成十七年（二〇〇五）に三根町、北茂安町、中原町が合併し、現在のみやき町となった。<sup>32</sup>このように、元来は主に三根郡として扱われてきた地域は、明治や昭和の町村制を経て分割・統合され、平成の大合併により、みやき町となったのである。

図三 浮立が継承されているみやき町内の神社（筆者作成）



地理院地図 URL: <https://maps.gsi.go.jp/>

## 第二章 浮立が行われている神社とその特徴

筑後川に近く、古くから軍事や交通の要衝として重視されてきたみやき町には、どのような神社が位置しているのだろうか。本稿では浮立を主に扱うため、本章では浮立が継承されている六社（図三）と祭礼の概

要、そして藩政期に行われていた神社への支援について触れる。

まず、大字白壁に位置し、肥前一宮として知られる千栗八幡宮は、神亀元年（七二四）<sup>33</sup>に八幡神の霊夢を受けた養父郡司・壬生春成により創建されたと伝わる。なお、「千栗」という地名は、夢の中で授かった千株の栗が一夜で生えていたという伝説に因むという<sup>34</sup>。当神社は、承平年間（九三一～九三八）に宇佐八幡宮の別宮となって以来、九州五所別宮の一つとして崇敬された。そして、中世以降は肥前一宮として崇敬を集め、慶長十九年（一六一四）から宝暦五年（一七五五）には、河上社との間で一宮の地位を争う相論が行われた。

現在の主な行事としては、三月十五日の御粥祭<sup>37</sup>、九月十五日の放生会、九月十五日に近い日曜日に行われる行列浮立などが挙げられる。寛政元年（一七八九）の奥付がある千栗八幡宮の「寺社差出」には、旧六月十五日の祇園会と、旧八月十五日の放生会の際に浮立を興行していたとあることから、少なくともこの頃までには、年に二度浮立が行われるようになっていたと考えられる。当神社の特徴としては、古くは年に二度浮立が開催されていた点、そして八幡社における重要な祭典・放生会の最大の行事として、浮立が奉納される点が挙げられる。

次に、みやき町北部の大字原古賀に位置する綾部八幡神社は、全国的にも珍しい旗上げ・旗下ろし神事で知られる。元久二年（一二〇五）に源頼朝の家臣・綾部四郎大夫通俊が、鎌倉の鶴岡八幡宮を勧請して創建したという<sup>39</sup>。しかし、石清水八幡宮所蔵の文書には長久三年（一一四二）に宇佐八幡宮弥勒寺領として綾部庄が記述されていることから、平安時代には既に宇佐八幡宮の勧請があり、綾部氏との関係の中で、鎌倉時代に起源が設定された可能性が指摘されている<sup>40</sup>。

そして、当神社は古来より脊振山が座主であったといい、祭神とし

て脊振山を開いた性空と共に修行したという隆信沙門、級長津彦命、<sup>しなつひこののみこと</sup>級長戸辺命の三柱の風神も祀られている。隆信沙門という人物は、『鎮西要略』<sup>41</sup>によると、肥前三根郡の人で性空の伴侶として修行に励み、法華經一萬部読誦の誓願を立てたという。しかし、法華經読誦を九千部終えたところで息絶え、これが脊振山の東峰に位置する九千部嶽の由来になったと記されている。<sup>42</sup>このことから、隆信沙門は少なくとも江戸時代初期までには性空や九千部山と結び付き、綾部八幡で行われている旗占の根拠とされていたことが分かる。

また、天正十五年（一五八七）の九州平定では社領が没収され、社職にあった人々が追放されたという。<sup>43</sup>その後、慶長三年（一五九八）に鍋島直茂から神事を勤めるようにという命令と米の寄進があったことから、当神社は古くからの座主・脊振山は変えず、社職にあった人々を呼び戻した。そして、「九千部山風災転除之祈念、無怠慢可相勤旨被仰付候由候事」と、九千部山の風災転除の祈念を怠ることなく勤めるよう命じられたという。

現在の主な祭礼としては、七月十五日の旗上げ神事、九月一日の九千部山詣、九月の彼岸中日の浮立、翌日の奉納相撲・旗下ろし神事が挙げられる。また、弘化四年（一八四七）に提出された「寺社差出」には「一戸張・御粥鉄鉢、從御上御奇進被遊候事、年号相知レ不申候得共、旧記ニ右之通御座候」とあり、詳細は不明だがこの頃までには粥占が行われていた可能性があるだろう。また、綾部八幡神社の宮司様によると、当神社においても三十年ほど前までは、周辺地域についての粥占が行われていたという。このように、綾部八幡神社は風神信仰との結び付きの中で、近世までには旗占が行われるようになり、現在も旗占が中心の特徴的な神事が多いと言える。

ここからは、旧三根町に位置する三社を紹介する。まず、大字西島に位置する西乃宮八幡神社は、一条天皇の勅願により社殿の造営が開始され、長徳二年（九九六）二月卯の日に遷座されたと伝わる。<sup>47</sup>その後、寿永年間（一一八二―八四）には鎌倉権五郎景政が社殿を改築し、南北朝期には足利尊氏が戦勝祈願と祭田の奉納を行ったという。<sup>48</sup>そして、太宰少貳貞頼の次男・横岳頼房が西島城を築いてからは、横岳氏より鎮守として崇敬され、神田の奉納や祭資の寄進が行われた。<sup>49</sup>また、近世には元和九年（一六二三）と元禄十二年（一六九九）に社殿の改築が行われた。<sup>50</sup>

現在の祭礼・行事としては、二月二十八日の「お粥さん」、<sup>51</sup>四月十五日の春祭り、七月十五日の夏越祭り、十月二十日に近い日曜日の秋祭りが挙げられ、秋祭りでは本分区の頓宮まで神楽・浮立を伴った御神幸がある。<sup>53</sup>また、当神社の浮立は鉦を打ち鳴らすことから、「ガンガン浮立」とも呼ばれる。<sup>54</sup>

次に、大字東津に位置する宇佐八幡神社は、弘仁二年（八一）に豊前宇佐八幡の神霊を勧請したことに始まるといわれ、宇佐八幡との結び付きを示す話が次のように伝わっている。元来は宇佐八幡の荘園領であったことから、毎年九月の大祭には、宇佐八幡より五十名ほどの人々が祭礼の奉仕に訪れていた。しかし、祭礼前後に起こった地元住民と宇佐からの供奉人との諍いにより、双方に死傷者を出すこととなった。具体的年代は不明だが、それ以来宇佐からの供奉人は来なくなったとい<sup>55</sup>う。また、戦国時代には龍造寺氏と大友氏との戦乱に巻き込まれ社殿などが焼失したが、後に龍造寺隆信により祭田が寄進され、鍋島藩政期には藩費で造営されていた。<sup>56</sup>

現在は他の旧三根町の神社と同じく、十月二十日を中心とする日曜日

に秋祭りが行われている。この秋祭りは松枝地区の箱崎八幡神社まで御神幸が行われるもので、七地区のうち二地区が交代でしめ元を勤め、他の五地区が輪番で浮立を奉納している。<sup>57</sup> また、いつ始まったかは不明だが、以前は二月の初卯にお粥試しが行われ、近年はその代わりとして、一年の吉凶を占う的射祭りが毎年二月二十七日に行われていた。<sup>58</sup>

また、当神社周辺には、社伝にまつわる塚が存在している。主なものを挙げると、最初に神社を勧請した位置にある塚田（古宮の塚）、喧嘩の際に血で汚れた御輿を埋めた柿木雑みこし塚、喧嘩による死者を埋葬した豊前塚（力塚）などである。<sup>59</sup> 豊前塚は土壌改良工事が行われた際に取り壊され、現存しないものの、宇佐八幡との繋がりを示す塚の存在は、他の神社には見られない特徴と言えるだろう。

次に、大字天建寺に位置する矢俣八幡神社は、現在地に移るまでの間に二度の遷座があったと伝わる。当神社は陽成天皇の時代（八七六～八八四）の官吏・藤原左衛門尉秀清が、京都石清水八幡宮を勧請して元慶二年（八七八）に坂口村の開平に創建したことが始まりだといふ。<sup>61</sup> そして、当神社を篤く崇敬した領主・納江出雲守源義宣は、弘安六年（一二八三）に土井外地区の宮村に遷座させた。このときに九月二十七日を祭日として神事が定められ、能楽、流鏑馬、浮立が奉納されたといふ。<sup>62</sup>

時代が下り、慶長五年（一六〇〇）に鍋島勝茂は徳川家康の命で筑後柳川の立花氏を攻めることとなり、当神社にて先勝祈願と徳川家・鍋島家の和合祈願を行ったところ、無事成就した。<sup>63</sup> この出来事により、代々の佐賀藩主に篤く信仰され、藩による支援が行われるようになった。また、鍋島勝茂の命で成富兵庫茂安が千栗土居を築いた際は、当時の鎮座地・宮村が堤防の外側になることから再度遷座が行われ、現在地

に鎮座することとなった。元和二年（一六一六）には神殿や拝殿、参道といった設備が整備され、移転後も今まで通りの祭典料を藩主から手渡し、従来の祭典を継続するようという内容の書状が残されている。<sup>64</sup>

現在の主な祭礼としては、十月二十日を中心とする日曜日に行われる秋の大祭が挙げられる。例年浮立と稚児舞が奉納されていたが、令和元年（二〇一九）より浮立は五年に一度の奉納になった。また、古くは二月二十七日に粥占が行われ、旧矢俣郷内の農作物の吉凶や天候、風水害、社会全般などを占っていたといふ。<sup>65</sup> 当神社は佐賀県最古の記録とされる長享二年（一四八八）の風流についての文書を有し、浮立の内容については「神仏混合の堂宇上棟祝浮立」と称され、他に類例のない特徴的なものが継承されている。詳細は第三章にて後述するため、本章では割愛する。

最後に、十二年に一度の午年に限り浮立が奉納される、中津隈宝満神社について紹介する。当神社は大字中津隈に位置し、境内には五世紀中頃から後半に築かれたと推測される中津隈前方後円墳がある。創建は天平四年（七三二）で、筑前の竈門山宝満宮の神霊を勧請し、字松本に神社を建立したことが始まりだと伝わる。<sup>67</sup> そして、弘仁元年（八一〇）に現在地へ移転し、弘仁四年（八一三）に山王社を、興国（南朝年号）二年（一二三二）に太宰府天満宮を勧請したといふ。その後、正平（南朝年号）九年（一二三四）に板部越前盛成尚が、神殿の修造や神楽田・燈明田などの寄付を行ったと伝わる。<sup>68</sup>

また、戦国時代から近世初期には、神社一帯が中核部と推定されている中津隈城が存在していた。ただ、当神社は元亀元年（一五七〇）に豊後の大友氏と龍造寺氏との争乱に巻きこまれ、御神体以外は全て焼失し、天正十年（一五八二）に龍造寺政家が社殿を再建したといふ。<sup>70</sup>



現在の祭礼として挙げられるのは、前述した通り十二年に一度の午年に行われる御幸祭りだ。起源は不明ながら、神社創建当初に始められたと伝わり、明治三年（一八七〇）の大祭以降は確実に実施され続けているという。<sup>71</sup> 平成十四年（二〇〇二）十月二十七日に開催された際は、神事や境内での奉納舞、下宮への御神体の遷宮が行われ、遷宮では稚児・舞姫・毛槍・鉦・太鼓などが行列で練り歩き、周辺地域からの見物客も多かったという。<sup>72</sup> このことから、他地区の形態と類似した、行列浮立のような形式だと推測される。当神社の浮立は資料が少なく、詳細は不明な部分も多いが、午年に限り行われる点が特徴的だと言えよう。

ところで、江戸時代の佐賀藩は、蔵入地に位置する一部の神社に対して、神領宛行や米、銀の支給といった経済的な支援を行っていた。寛政十二年（一八〇〇）の記録には、「蔵入三八社」として次の神社が挙げられている。

白山八幡・与賀社・本庄社・鳩森・大堂六所大明神・牛嶋天神・古瀬（巨勢）宮・新北大明神・西宮大明神・武藤八王子・木原山王・太田大明神・徳善八幡宮・四面宮・矢俣八幡・西島八幡・綾部八幡・金立山（金立社）・砥川八幡・佐留志大明神・山口村太神宮・大町八幡・小田三社宮・福母八幡・大渡天神・喜佐野木村大明神・天山宮・晴気春日祭妙見宮百手・同印鑰八龍若宮・鍋島諏訪大明神・櫛田大明神・八田祇園・東照宮・向陽軒・元三大師・精天神・御牧祭・水上宝劔<sup>73</sup>

これらの他にも、次の十六の神社などに、藩の財政から米や銀の支給が行われた。

堀江大明神・新庄八幡宮・蠣久天満宮・修理田山王・中佐嘉天満宮・御三霊神様・伊勢屋町大神宮・千栗八幡宮并末社・中津弁財天・晴気村注連元・本庄院供僧・境原大明神・脊振山弁財天・御本丸大黒天・日峯社・川上社<sup>74</sup>

このうち、現みやき町に位置する神社は、「蔵入三八社」の「矢俣八幡・西島八幡・綾部八幡」と、十六の神社などとして挙げられている「千栗八幡宮并末社」だ。いずれも八幡社で、現在も浮立が奉納されている。また、古社の創建記念祭では、藩による修造や銀の奉納が行われ、千栗八幡宮では安永元年（一七七二）に一五〇〇年祭が、綾部八幡では享和二年（一八〇二）に六〇〇年祭が行われている<sup>75</sup>。また、詳細は次章で後述するが、矢俣八幡では元治二年（一八六五）に二五〇年祭が行われた。

これらのことから、みやき町にて浮立が奉納されている神社の特徴として、まず八幡社がほとんどを占めていることが挙げられる。古くは宇佐弥勒寺の荘園領であった地域が多いこと、そして肥前一宮として崇敬された千栗八幡宮をはじめ、筑後川の対岸には大善寺玉垂宮や高良山、宝満山も位置している。このような八幡信仰に深く関わってきた神社や霊山が周辺に多く位置するという地理的な要因から、当地の八幡信仰が影響を受けた可能性があるだろう。

次に、占いに関与していることが多い点も特徴だ。現在は千栗八幡宮と西乃宮八幡神社にて粥占が、綾部八幡神社にて旗占が行われており、古くは宇佐八幡神社にて的射と粥占が、矢俣八幡神社と綾部八幡神社にて粥占が行われていた。現在も大きな儀式として行われている千栗八幡

宮の「お粥試し」からの影響については、今後調査する必要があるが、神社周辺地域が農耕と深く関わっていたこと、そして佐賀藩からの経済的な支援を受けていたことから、豊凶を知る占いが必要とされた可能性があるだろう。

また、藩政期には矢俣八幡神社、西乃宮八幡神社、綾部八幡神社、千栗八幡宮に藩より銀や米の支援が行われていた。このような支援を受けていた過去があったからこそ、各神社における祭礼が重視され、現在まで祭礼が継承されてきた一つの要因となつたのではないだろうか。

このように、現在浮立が継承されている神社は八幡社が多く、何かしらの占いに関与していたこと、そして藩からの支援を受けていた神社が多いことが特徴だと言えよう。

では、継承されている浮立の特徴はどのような部分にあるのだろうか。次章では、みやき町で継承されている浮立の芸態及びその特徴について考察する。

### 第三章 行列浮立とみやき町

前章では、浮立が継承されている神社の概要と特徴について述べた。では、現在みやき町で継承されている浮立は、先行研究にてどのように論じられてきたのだろうか。

そもそも旧肥前国を中心とした現在の佐賀県、長崎県では、祭礼の際に行われる芸能を「浮立」と総称する傾向にあり、浮立はおおよそ九種類の芸態に分類されている（表一）。旧肥前各地に継承されている浮立をまとめ、その芸態について論じたものとしては松尾禎作の『佐賀の浮立（郷土シリーズ…一）』<sup>77</sup>にはじまり、山崎諭の『肥前浮立をたずねて』<sup>78</sup>、米倉の『日本の民俗芸能』<sup>79</sup>といったものが挙げられる。そして

これらは、みやき町で継承されている浮立のほとんどを行列浮立として分類している。

行列浮立は大名行列を模した行列を形成するなど、神輿の供として練り歩く形態を主とするもので、特にその道行きに焦点が当てられ分類された芸態だと言えよう。米倉は「特に大名行列を模し、浮立の構成が行列に中心をおくもの」、金子は参勤交代の大名行列にて雇われていた奴の所作を真似、浮立として構成されたものを行列浮立と定義している。行列浮立は佐賀県三養基郡と長崎県北高来・諫早地方に多く見られるが、他の芸態に付随するものまで含めると旧肥前国一円に分布している。<sup>82</sup>そのため、山崎諭は様々な分子が混ざつたものと純大名行列式のものに大別し、みやき町の綾部八幡神社、千栗八幡宮、矢俣八幡神社、西乃宮八幡神社<sup>83</sup>などを後者の例として挙げている。<sup>84</sup>しかし、行列浮立に焦点を当てた論考は、管見の限り金子信二の「行列浮立考」が唯一のものだと思われる。その要因として、芸態にあまり差がなく、他の浮立との複合形も含めると地域問わず広く分布しており、分析が困難であることが挙げられよう。

では、金子が行列浮立の原型として指摘した参勤交代の行列は、いつ頃から始められたのだろうか。参勤交代は、三代將軍家光の治世・寛永十二年（一六三五）に武家諸法度が改定され、制度化された。ただ佐賀藩では寛永十九年（一六四二）より長崎御番の命を受け、前年に任命された福岡藩と共に隔年で長崎警備に当たった。<sup>86</sup>そのため、長崎御番の主力であった佐賀・福岡藩とそれを助けた諸藩（筑前の秋月、肥前の唐津・島原・平戸・大村・五島）は幕府より対客・消防・門衛・川港普請といった交役の一切を免除され、参勤の際の江戸滞在期間も百日程度であった。<sup>87</sup>また、道中の供人数は二二〇〜四〇人ほど、江戸到着まで

一ヶ月の道程で、慶安元年（一六四八）以降に十一月参府、二月下国が定着したという。<sup>88</sup>

そして、このような大名行列が「神幸祭の恰好の芸能として、奴のユーモラスな動きと掛け声を風流化して、形をみせる芸能として発展していった。」<sup>89</sup>と考えられている。また、米倉は「大名行列の最初は軍備をした武士集団に過ぎなかったが、泰平の世になるにつれ、…（中略）：趣向をこらしはじめた。行列浮立は祭礼の行列に大名行列の趣向をとり入れ、より美しくより楽しく浮立化したものといえよう。」と述べている。継承されている地域により道具の種類や形態に差はあるが、行列浮立で用いられる代表的な道具としては、挟箱<sup>91</sup>、毛槍<sup>92</sup>、鉄砲<sup>93</sup>、長刀、台弓<sup>94</sup>が挙げられる。<sup>95</sup>

また、行列浮立の発生時期がはっきり分かる例として、金子は明治六年（一八七三）に始められた、唐津市相知町<sup>あうち</sup>の熊野神社の例を挙げている。<sup>96</sup>そして『前川日記抄』<sup>97</sup>の天保三年（一八三二）の記述から、天保年間（一八三〇～三四）には既に行列浮立が行われていた可能性を指摘している。<sup>98</sup>更に、「大半の行列浮立は幕藩体制がゆらぎはじめ、参勤交代制度が廃止となった後、江戸時代の後期から明治にかけて発生したのではなからうか」と述べている。<sup>99</sup>このように、行列浮立は近世の大名行列に端を発し、祭礼行列に付随する芸能として発展してきたと考えられてきた。

更に、金子は「行列浮立考」にて行列浮立が継承されている地域や芸能から、廃絶したものも含む佐賀県内の十六例を五種類に分類している。そして、みやき町の綾部八幡神社、千栗八幡神社、西乃宮八幡神社をⅡ類とし、特徴として三養基郡の八幡宮を中心に継承され、鉦浮立が囃子に付随する点を指摘した。<sup>100</sup>また、元々同系統であったと考えられ

る基山郡や鳥栖市の浮立は、三養基郡に広く分布する獅子舞が付随する点で特徴で、現在は幾分芸能に差があるため区別している。<sup>101</sup>

このように、みやき町内には行列浮立が多く、神輿を伴い前述のような道具や獅子舞と共に町を練り歩く形がよく見られる。ただ、芸能が行列浮立に分類されているがゆえに先行研究ではあまり注目されず、文献も少ない。しかし、その中で最も特徴的なのは、矢俣八幡神社の浮立だろう。

佐賀県下で最も古い風流の記録は、矢俣八幡神社所蔵の長享二年（一四八八）の文書「風流次第之事」だ。<sup>102</sup>これは一番から五番までの風流を奉納する地区の順番と宮司坊の百蔵坊が記されたもので、当時の芸能は不明ながら、座主坊が中心となり各地区が風流を行っていたことがうかがえる。それ以後の記録や伝承としては、弘治二年（一五五六）に堀江神社の神職・山本玄蕃が始めたとされる天衝舞浮立の起源伝承や、慶長三年（一五九八）に綾部八幡神社において佐賀藩祖・鍋島直茂が催した風払除浮立の記録<sup>103</sup>が挙げられる。ただ、矢俣八幡神社の記録は、応仁の乱が始まった応仁元年（一四六七）から二十年ほど下った時期に記されたもので、他の記録や伝承よりも格段に古い。

また、当神社の浮立はその掛け声から「たつた浮立」とも呼ばれ、「神仏混合の堂宇上棟祝浮立」<sup>104</sup>とされる。その起源については、次のように紹介されることが多い。文永・弘安の役の際に矢俣郷の人々も多く動員され、住民は神仏の加護を求めていた。そこで当地の領主であった納江出雲守源義宣は、彼らの願いに応えて天建寺と部下の冥福を祈る宝篋印塔を建立した。すると、住民は寺の建立を喜んで「堂宇がタッタ、タッタ」と神仏を礼拝し、これにより「たつた浮立」と呼ばれるようになったという。<sup>105</sup>ただ、『三根町史』では出陣の際に兵士が「起った」こ

図四 『兎園小説』外集巻二より  
「筑後柳川風流祭所用獅子頭」



すべて赤黄赤白の紙を細のごとくに切りしもの也

出典：日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』第二期第二卷、日本随筆大成刊行會、一九二八、四〇六頁。

とが起源という説も紹介されており、その由来については判然としな  
い。<sup>106</sup>

そして、登場する役柄に神仏習合が見られることも特徴的だ。岡泰雄  
は「奴像一二人は仏教の十二神将にかたどつて、かねは観音菩薩、モ  
リヤーシは地藏菩薩・大太鼓は毘沙門天を表現し、獅子の背に負う五色  
の色紙は天地間の五色の光明を表現するものだという」と紹介してい  
る。観音菩薩、地藏菩薩、毘沙門天という三尊の組み合わせは、京都清  
水寺の本尊・十一面観音菩薩と脇侍の地藏菩薩、毘沙門天と一致する  
が、両者の関係については不明だ。また、大太鼓とモリヤーシが身に付  
ける獅子の被り物については、金子が「東日本において一人立ちの獅子  
舞をおもわせる」と指摘している。更に、江戸時代後期の随筆集『兎  
園小説』<sup>107</sup>外集第二では「筑後柳川風流祭所用獅子頭」が紹介されてい  
る（図四）。<sup>108</sup>そのため、少なくとも文政八年（一八二五）までには、現  
みやき町に近い筑後柳川の風流においても、太鼓打ちが獅子を象った被

り物を用いていたことが確認できる。

また、金子は筑後市水田の水田天満宮に奉納される稚児風流との類  
似点を指摘し、米倉利昭が美麗田楽からの影響について言及しているこ  
とからも、筑後地方との関係を考えるべきだと述べている。<sup>109</sup>『兎園小説』  
の例からも、筑後地方の風流との間に、何かしらの影響関係があったと  
推測することができよう。当神社に奉納される浮立は類例がなく非常に  
貴重だが、継承の難しさから令和元年（二〇一九）より五年に一度の奉  
納になっている。

先行研究において、みやき町内の八幡社を中心に継承されている浮立  
は、そのほとんど全てが行列浮立に分類され、鉦浮立が付随する場合が  
多いと指摘されてきた。ただ、『三根町史』では「祭礼には、浮立が不  
離一体のものであるが、三根町内三社の浮立は、三社それぞれ趣を異に  
する」と記されている。そのため、単に同一芸態として見るのではな  
く、それぞれの浮立の経緯をたどり、継承されてきた要因を明らかにす  
ることが今後の課題だろう。そこで、次章では近世資料からみやき町の  
浮立を検討し、行列浮立への展開を考察する。

#### 第四章 近世みやき町における浮立の展開

前章では、みやき町に継承されている浮立の芸態や特徴について触れ  
た。そこで、本項では近世の寺社資料から、みやき町における浮立の展  
開について検討する。

浮立の展開を考える上で参考になるのが、矢俣八幡神社に伝来す  
る文書「矢俣八幡宮御祭礼入具次第」である。この次第には元和二年  
（一六二六）の記載があり、祭礼に必要な道具が次のように挙げられて  
いる。



矢俣八幡宮御祭礼入具次第	
……(中略)……	
一 壺本持之竹	注連竹用式本
一 五本持之竹	風流かさ臺ノ用六本
外二借物	
一 御小袖	かさ六本之上ふき也 <sup>人</sup> 拾貳
一 御小袖	たいこうち二人 六ツ
	もらしうち四人
一 御小袖	太鼓上ふき入 仁 <sup>三</sup> ツ
一 袴	太鼓、もらしうち 六具
一 毛頭	右同 六ツ
一 扇子	右同しミロミ入 拾貳本
	壺疋ハ御上馬
	七疋ハ七人ノ社祭
一 鞍道具	四疋ハ行事四人乗 拾三背
	壺疋ハやふさめ馬
一 太刀	行事四人 四振
一 ひへひろ <sup>〇す</sup>	行事四人 四本
一 糸ほし内	二ツたて糸ほし 四かしら
	二ツなり糸ほし
一 かミしも	行事四人 四具
一 もふせん	御馬ノ上敷 壺枚
元和貳年	
八月朔日	宮司坊

社人 三位  
隼人  
御代 彦三郎  
惣ノ市  
右、御祭礼入具之儀、元和貳年三根郡御蔵入ニ罷成候ニ付而、右之米毎年可差出由勝茂様御印出候て、石井大炊方ヨリ被相渡候儀、<sup>(北廣藩初代)</sup>  
慥と存候、以上  
元和貳年  
十月十一日  
成富十右衛門尉<sup>(成富氏車茂安カ) 115</sup>

ここに「かさ」や太鼓の上に葺くための小袖が必要とされていること、そして「たいこうち」や「もらしうち」の役柄が見えることから、浮立に関係する道具が挙げられていると推測される。現在の行列浮立においても太鼓打ちやもらし打ちが登場することが多く、天衝舞浮立といった他の芸態では傘鉾が用いられる例もある。<sup>116</sup> 芸態について推測することとは難しいが、毛頭を身に付けた「たいこうち」が小袖を葺いて装飾した太鼓を打ち、同様の格好をした「もらしうち」が締太鼓を打っていたであろうこと、風流でよく用いられる傘鉾などが登場していた可能性があるだろう。

そして、先述の『兎園小説』外集二巻では筑後柳川の獅子頭が紹介されていたが、『兎園小説』第十二集でも筑紫の風流が紹介されている(図五)。そして「筑紫の風流」の図には、毛頭のようなものを身に付け

図五 『兔園小説』 卷十二より  
「風流祭の圖」



出典：日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』第二期第一巻、日本随筆大成刊行会、一九二八、三一五頁。

た太鼓打ち四名、毛頭と仮面を身に付けたもらし打ち一名、そして小鼓の打ち手一名が描かれる<sup>118</sup>。また、大太鼓に立てられた幣束には布が巻かれ、「女の帯をもてかざる」と横に記されている。同様の芸態である<sup>119</sup>と断定はできないものの、登場する役目や太鼓の飾り付け方からは、同書の挿絵のような形が想起される。

「矢俣八幡宮御祭礼入具次第」からは、神馬に乗った行事をはじめ、風流かさ、太鼓打ち、もらし打ちが行列になって巡幸していた可能性を推測できるが、果たしてそれが行列浮立と呼ばれていたかは不明である。ただ、筑後地方を中心に継承されている風流と似たような道具や役目が登場していた点は注目すべきであり、後世と同じように浮立という表記が用いられていた可能性はあるだろう。

また、みやき町の宇佐八幡神社に伝わる文書「宇佐宮八幡社御祭式之事」<sup>119</sup>には、九月二十六日の明け方頃から昼にかけて「御神幸行烈」が行われ、楽人や神馬が付随していたことが記されている。当資料の「御神幸行烈」と、現在の行列浮立との関係については今後の課題だが、少

なくとも近世の宇佐八幡神社では九月二十六日に祭礼行列が行われていたと考えられる。

そして、矢俣八幡神社では、元治二年（一八六五）四月十一日から十三日の三日間にわたり、創建二五〇年<sup>120</sup>祭が行われた。少し長くなるが、その内容を引用する。

#### 御祭式

一十一日朝六時御本社御発興獅子分御興迄江口村分

獅子 二口 八人 犀ノ毛 武本 僕四人 先箱 一対 僕四人

立笠 二口 八人 墓笠 武本 僕二人 弓 二口 二対 僕二人

鉄炮 二挺 二人 大太鼓 武本 僕三人 笛 二口 二十人 上下大小

社家 将束 社人 将束 僕二人 僕一人

御興 江口・坂口 両村 日出笠 小者 長柄 片箱 合羽籠

歩行 上下 座主 小附上下 小者 長柄 片箱 合羽籠

後御供 坂口村分 何れも上下 庄屋中 袴

十一日正八ツ時、御本社江還御之上御供献

附り、三日之間御興之儀、松尾社江飾り置

十二日 神楽社人方宿三而五人神楽也

十三日能興行 中通安永 間狂言 西嶋村分 奉納之事

右三日三夜三時勤行、尤四ヶ之法用也、出仕之院々左二

百蔵坊観晃

覚 養 坊  
欽 行 坊  
玉 蔵 坊  
実 行 坊

## 善勝坊

右何れも横尾七條也

御目附方宿 南嶋庄屋秀十宅

郡方代官所宿 汐入庄屋八郎兵衛宅

一 献上御礼 中奉書折付 寺社方江捧出ル向ハ右役所分取計之事

一 寺社役人両三人且代官所役人三、四人、何れも御供物御礼等指遣ス

一 代官所筋江御年祭願、寺社方同様差出候、尤庄や名当ニノ

一 庄屋中分ハ能興行願書代官所江指出ス

参詣人休足所立方願、右をも庄や中分指出す<sup>121</sup>

この記録から、御輿行列に獅子や犀ノ毛、立笠、先箱、台弓、鉄砲などが付随していたことが分かる。犀ノ毛は二本で僕（奴）四名、先箱は一对で僕四名、立笠は一本で僕二名、臺笠は一本で僕二名、弓は二丁で二名、鉄砲は二丁で二名、太太鼓は一台で三名と、現在の行列浮立に比べると小規模な構成だが、共通する道具が見られる点は注目すべきだろう。ただ、みやき町の浮立の特徴として指摘される鉦の記載がない点は、現在の芸態と異なるといえる。

また、関係資料には「行列」や「浮立」といった文言が見られないことから、この奴振りはあくまでも神輿巡幸の一部として行われたものと推察される。このような行列が神幸祭に付随することで、二五〇年祭という節目に相応しい厳粛さや華々しさが添えられたのではないだろうか。また、藩から重視され支援を受けていたからこそ、大名行列を模した奴振りを祭礼行列として行うことが許された可能性もあるだろう。そして、年祭として藩の許可の下で祭式が整えられていることから、他社の年祭でも同様の行列が付随していた可能性も指摘できよう。他の例

については今後調査が必要だが、少なくとも元治二年（一八六五）頃までは奴振りが付随した年祭が行われるようになっていたと考えられよう。

これらのことから、みやき町では長享二年（一四八八）の矢俣八幡神社の風流の記録が最も古く、少なくともその頃には同神社にて風流が行われていたと考えられる。そして、時代が下り元和二年（一六一六）には、太鼓打ちともらし打ちが登場する浮立が同神社にて行われていた。この浮立が行列で行われていたかは不明だが、江戸時代後期の『兔園小説』に描写されている筑紫の風流と類似していた可能性があるだろう。また、宇佐八幡神社の文書に「御神幸行列」という記載が見られることから、少なくとも江戸時代には同神社にて祭礼行列が行われていたと考えられる。

現在のように、大名行列を模した形で練り歩く浮立の起源は判然としないが、元治二年（一八六五）に行われた矢俣八幡神社の二五〇年祭では、現在と共通する道具を用いた小規模な奴振りが神輿渡御に付随していたことが明らかとなった。このような祭式を整えた背景には、藩から重視され経済的な支援が行われてきた神社の周年祭という要因があったことが推測され、現在の行列浮立への展開を考える上で、一つの手がかりになると考えられる。当年祭が行われたのは明治元年（一八六八）の三年前であり、金子が指摘したように、幕藩体制の揺らぎが影響していた可能性はある。ただ、年祭として藩が許可した祭式であることから、少なくとも年祭においては大名行列を模したものが認められていたと考えられよう。

## 結論

みやき町は古くから軍事や交通の要衝として重視され、中世には綾部城や千栗城などが整備された。また、肥前一宮として崇敬された千栗八幡宮をはじめ、古くからの八幡社が多く位置しており、近世には佐賀藩より支援を受けながら存続した。また、当町の浮立が継承されている神社の特徴として、その多くが八幡社で粥占や旗占といった占いに関与している点、藩政期に重視され経済的な支援を受けていたことが多い点が挙げられる。

そして、近世の寺社資料から、浮立は祇園祭や放生会、御神幸といった祭礼や、祈禱の願成就と結び付いて行われていたことが分かった。当地に多い大名行列を模した行列浮立がいつ頃から行われていたかは不明だが、金子が指摘したように佐賀藩において参勤交代が行われるようになって以降の形であるかと推測される。更に、矢俣八幡神社の例からは、幕末の創建記念祭において神輿行列に小規模な奴振りが付随していたことが新たに明らかとなった。ただ、大名行列に関係のない太鼓打ちやもらし打ちは江戸時代初期から文献にあらわれ、筑紫の風流との類似点も挙げられる。このことから、奴振りが付随する以前は大名行列よりも太鼓を打つことが中心であり、祭礼の一部として行われていた可能性があるだろう。

今後の課題として、まずみやき町内の浮立における現在の状況と特徴を明らかにすることが挙げられる。それぞれの浮立について詳しい調査があまり行われてこなかったため、フィールドワークにより現状をまとめ、個々の特徴について明らかにしていきたい。そして、芸態だけでなく、それぞれの地区が有する歴史や宗教的側面からも、調査を進める

べきだろう。特に筑後地方をはじめとする隣接地域との比較により、その類似点や相違点を明らかにし、浮立の発生や展開について様々な角度から分析を進める予定だ。今後は、従来あまり注目されてこなかった佐賀県東部の浮立が持つ特徴や、その成立についてだけではなく、祭礼と祈禱の関係についても明らかにしていきたい。

## 参考文献（掲載順）

- 佐賀県教育委員会編『佐賀県の民俗芸能…佐賀県民俗芸能緊急調査報告書』（佐賀県文化財調査報告書、第一四二集）、佐賀県教育委員会、一九九九。
- 福岡県教育委員会、佐賀県教育委員会『九州地方の民俗芸能一 福岡・佐賀』海路書院、二〇〇七。
- 「みやき町公式HP」（最終閲覧日：二〇二三年九月一日）URL: <https://www.town.miyakigijp/index.html>
- みやき町「第一次みやき町総合計画…基本構想」みやき町、国立国会図書館デジタルコレクション URL: <https://dl.ndl.go.jp/pid/12397320>（最終閲覧日：二〇二三年九月一二日）
- 北茂安町史編纂委員会編『北茂安町史』北茂安町、二〇〇五。
- 吉田扶起子『脊振山信仰の源流—西日本地域を中心として—』中国書店、二〇一四。
- 秋本吉郎校注『日本古典文学大系』第二、岩波書店、一九五八。
- 北茂安町史話伝説編集委員会編『北茂安町の史話伝説』北茂安町、一九八三。
- 三根町史編さん委員会編『三根町史』三根町、一九八四。
- 佐賀県史編さん委員会編『佐賀県史』上巻（原始・古代・中世編）一九六八。
- 佐賀県立図書館『佐賀県近世史料』第十編第一巻、佐賀県立図書館、二〇一〇。
- 中原町史編纂委員会『中原町史』上巻、中原町、一九八二。
- 中原町史編纂委員会『中原町史』下巻、中原町、一九八二。



## 注

- 1 平成十一年（一九九九年）に行われた佐賀県の民俗芸能緊急調査において、「神楽」と称するものは神崎市神崎町に位置する櫛田宮の神幸祭にて供奉される獅子舞「太神楽」のみである。
- 2 米倉利昭「はじめに」佐賀県教育委員会編集『佐賀県の民俗芸能…佐賀県民俗芸能緊急調査報告書』（佐賀県文化財調査報告書、第一四二集）、佐賀県教育委員会、一九九九年。
- 3 令和五年八月末現在。「みやき町公式HP」（最終閲覧日：二〇二三年九月一日）  
URL: <https://www.town.miyaki.lg.jp/index.html>
- 4 みやき町『第一次みやき町総合計画：基本構想』みやき町、国立国会図書館デジタルコレクション、三頁。URL: <https://dlnd.lg.jp/pid/12397320>（最終閲覧日：二〇二三年九月十二日）
- 5 みやき町、同掲書、三頁。
- 6 天正元年（一五七三）から明治二年（一八八九）までの期間で一八三回もの洪水の記録があり、平均すると二年に一回以上のペースで洪水に見舞われていたことになる。北茂安町史編纂委員会編『北茂安町史』北茂安町、二〇〇五、二一頁。
- 7 北茂安町史編纂委員会編、同上、一〇七頁。
- 8 秋本吉郎校注『日本古典文学大系』第二、岩波書店、一九五八、三七七～八〇頁。
- 9 北茂安町史話伝説編纂委員会編『北茂安町の史話伝説』北茂安町、一九八三、十六頁。
- 10 北茂安町史編纂委員会編『北茂安町史』北茂安町、二〇〇五、一四九頁。
- 11 北茂安町史編纂委員会編、同掲書、二〇三頁。
- 12 特に北部九州地方を中心とした八幡信仰の興隆については、吉田扶起子『脊振山信仰の源流―西日本地域を中心として―』（二〇一四、中国書店）に詳しい。
- 13 北茂安町史編纂委員会編、同掲書、二〇三頁。
- 14 北茂安町史編纂委員会編、同掲書、二〇三頁。
- 15 北茂安町史編纂委員会編、同掲書、二〇三頁。
- 16 北茂安町史話伝説編纂委員会編、同掲書、一八〇頁。
- 17 北茂安町史話伝説編纂委員会編、同掲書、一五二頁。
- 18 綾部五城などと呼ばれた、鎮西山城、船隈城、少式山城、白虎山城、鷹取城、宮山城、臥牛城の総称。綾部城の位置は博多の姪浜城と筑後の高良山城を結ぶ背振峠の要衝であり、大宰府と佐賀間の捷路を押さえられる場所であった。
- 19 千栗八幡宮が位置する丘陵地の東側と南側は、旧筑後川の浸食攻撃面で急な崖地であったため、天然の要塞として千栗城が置かれた。
- 20 三根町史編纂委員会編『三根町史』三根町、一九八四、一六九頁。
- 21 三根町史編纂委員会編、同掲書、一七〇頁。
- 22 三根町史編纂委員会編、同掲書、一七〇頁。
- 23 三根町史編纂委員会編、同掲書、一七一頁。
- 24 佐賀県史編纂委員会編『佐賀県史』上巻（原始・古代・中世編）一九六八、五八七～五九〇頁。
- 25 佐賀県史編纂委員会編、同掲書、五九〇頁。
- 26 佐賀県史編纂委員会編、同掲書、五九〇頁。

- 27 佐賀県史編さん委員会編、同掲書、五九〇頁。
- 28 佐賀県史編さん委員会編、同掲書、五九〇頁。
- 29 北茂安町史話伝説編集委員会編、同掲書、一六頁。
- 30 北茂安町史話伝説編集委員会編、同掲書、一七頁。
- 31 北茂安町史編纂委員会編、同掲書、一〇三〇頁。
- 32 みやき町、同掲書、三頁。
- 33 他に天平年中（七二九～四九）説や天平宝字年中（七五七～六五）説もあるが、具体的な創建時期は明らかではない。北茂安町史編纂委員会編、同掲書、一二六二頁。
- 34 北茂安町史編纂委員会編、同掲書、一二六二頁。
- 35 肥前千栗八幡宮、肥後藤崎宮、筑前大分宮、薩摩新田宮、大隅正八幡の五社。
- 36 佐賀県大和町川上に位置する、現興止日女神社。一宮相論の際は河上神社の座主・実相院と千栗八幡宮の座主・妙覚院が代表として争った。
- 37 北部九州地方に特有の、粥をカビさせて農作物の豊凶などを占う粥占が行われる。特に千栗八幡宮では「お粥試し」として鉢に盛られた粥を放置して肥前・肥後・筑前・筑後の四等分にし、そこに現れたカビの様子で豊凶を占っている。古くは九州全土を占うものだったという。
- 38 佐賀県立図書館『佐賀県近世史料』第十編第一巻、佐賀県立図書館、二〇一〇、一三頁。
- 39 中原町史編纂委員会『中原町史』上巻、中原町、一九八二、二四七頁。
- 40 中原町史編纂委員会、註39に同じ、二四六～四八頁。
- 41 編著者・成立年不明だが、神代から正保四年（一六四七）までの歴史が記されていることから、それ以降の成立と考えられる。
- 42 中原町史編纂委員会『中原町史』下巻、中原町、一九八二、四四五頁。
- 43 佐賀県立図書館、註38に同じ、三七二頁。
- 44 佐賀県立図書館、註38に同じ、三七二頁。
- 45 神仏を安置した厨子などの前や上にかける小さなとばりのこと。
- 46 佐賀県立図書館、註38に同じ、三七三頁。
- 47 三根町史編さん委員会編、同掲書、一〇〇一頁。
- 48 三根町史編さん委員会編、同掲書、一〇〇一頁。
- 49 三根町史編さん委員会編、同掲書、一〇〇一頁。
- 50 三根町史編さん委員会編、同掲書、一〇〇二頁。
- 51 元々は二月中の卯の日の大祭として行われていたもので、郷社であったことから三根郡全域を占う。
- 52 元来は十月十五日に行われていたが、現在の旧三根町の神社では、十月二十日に近い日曜日を中心に秋の祭礼が行われることが多い。
- 53 三根町史編さん委員会編、同掲書、一〇〇二～三頁。
- 54 三根町史編さん委員会編、同掲書、一二八頁。
- 55 三根町史編さん委員会編、同掲書、一〇〇四～五頁。
- 56 三根町史編さん委員会編、同掲書、一〇〇五頁。
- 57 三根町史編さん委員会編、同掲書、一〇〇六～七頁。
- 58 三根町史編さん委員会編、同掲書、一〇〇八頁。
- 59 三根町史編さん委員会編、同掲書、一〇〇五～六頁。
- 60 三根町史編さん委員会編、同掲書、一〇〇六頁。
- 61 三根町史編さん委員会編、同上、一〇〇八。
- 62 三根町史編さん委員会編、同掲書、一〇〇八～九頁。
- 63 三根町史編さん委員会編、同掲書、一〇〇九頁。
- 64 佐賀県立図書館『佐賀県近世史料』第十編第四巻、佐賀県立図書館、二〇一六、三七二頁。
- 65 三根町史編さん委員会編、同掲書、一〇一〇頁。
- 66 三根町史編さん委員会編、同掲書、一二二九頁。
- 67 北茂安町史編纂委員会編、同掲書、一二七二頁。
- 68 北茂安町史編纂委員会編、同掲書、一二七二頁。
- 69 元龜三年（一五七二）には龍造寺氏が神埼郡の崎村城主であった大塚氏を配していたことから、この頃には中津隈城があったと推定されている。しかし、大塚氏は天正十二年（一五八四）からの龍造寺氏衰退に伴い鍋島氏に仕え、初代藩主・勝茂の子である元茂が小城支藩に封じられると共に中津隈から去った。これにより、中津隈城は廃れていったと考えられている。
- 北茂安町史編纂委員会編、同掲書、三九八～四〇〇頁。

- 70 北茂安町史編纂委員会編、同掲書、一二七二頁。
- 71 北茂安町史編纂委員会編、同掲書、一二七二頁。
- 72 北茂安町史編纂委員会編、同掲書、一二七三頁。
- 73 佐賀県立図書館、註64に同じ、五頁。
- 74 佐賀県立図書館、註64に同じ、五頁。
- 75 現みやき町大字西島に位置する西乃宮八幡神社。旧三根郡の総社として崇敬された。
- 76 佐賀県立図書館、註64に同じ、十四頁。
- 77 松尾禎作『佐賀の浮立（郷土シリーズ・二）』佐賀県文化館、一九五四。
- 78 山崎論『肥前浮立をたずねて』『肥前浮立』刊行委員会、一九七四。
- 79 米倉利昭『日本の民俗芸能―四―佐賀県』『芸能』三三卷二号、芸能発行所、一九九一。
- 80 米倉利昭、同掲書、四一頁。
- 81 金子信二『行列浮立考』『佐賀民俗学』十七号、佐賀民俗学会、一九九八、五〇頁。
- 82 金子信二、註81に同じ、五二頁。
- 83 原文では「南茂安村矢俣八幡及び西島八幡」と紹介されている。西島八幡は大字西島に位置する西乃宮八幡神社と思われるため、ここでは現在使われている西乃宮八幡神社と表記した。
- 84 山崎論、同掲書、二三九頁。
- 85 金子信二、註81に同じ、四九頁。
- 86 佐賀県史編纂委員会編『佐賀県史』中巻（近世編）一九六八、七六頁。
- 87 佐賀県史編纂委員会編、註86に同じ、七六頁。
- 88 金子信二、註81に同じ、四九頁。
- 89 金子信二、註81に同じ、六五頁。
- 90 米倉利昭、同掲書、四一頁。
- 91 長方形の箱に担ぎ棒が付けたもので、箱には大名や神社の紋がつけてあることが多い。元々は衣類を入れるための箱。
- 92 羽熊、白熊、しゃーの毛、さいの毛（犀の毛）、鳥毛などと呼ばれ、長い柄の先に円盤を取り付け、そこに動物などの毛を付けて槍を模した道具。二人一組でこれを投げ渡すことで芸が競われることもあり、現在も一部の地域で投げ渡しが残っている。
- 93 鉄砲の形状に似せた木製のものが多く、袋に入れたものを持ち所作を行う。
- 94 弓と矢を持って歩くもので、破魔矢の飾り物が利用されることもある。
- 95 金子信二、註81に同じ、五二頁。
- 96 金子信二、註81に同じ、六三頁。
- 97 伊万里の陶磁器問屋を営んでいた前川家の私的な日記で、文政十三年（一八三〇）から天保七年（一八三六）の出来事が記されている。
- 98 金子信二、註81に同じ、六四頁。
- 99 金子信二、註81に同じ、六四頁。
- 100 金子信二、註81に同じ、五二頁。
- 101 金子信二、註81に同じ、五二頁。
- 102 金子信二『矢俣浮立』『佐賀民俗学』七号、佐賀民俗学会、一九八四、六四～七七頁。
- 103 佐賀県立図書館、註38に同じ、三七二頁。
- 104 三根町史編纂委員会編、同掲書、一二九頁。
- 105 三根町史編纂委員会編、同掲書、一二〇頁。
- 106 三根町史編纂委員会編、同掲書、一二二頁。
- 107 三根町史編纂委員会編、同掲書、一二二頁。
- 108 清水寺は宝亀九年（七七八）に始まり、延暦十七年（七九八）に坂上田村麻呂が自宅を仏殿として寄進したことで、本格的な創建がなされた。田村麻呂が東征の際に、観音の化身である地藏菩薩と毘沙門天の助力により勝利したことから、本尊を十一面四十二臂千手観音、脇侍を地藏菩薩と毘沙門天としたという。
- 109 武田昌憲『清水寺』志村有弘、奥山芳広編『社寺縁起伝説辞典』戎光祥出版株式会社、二〇〇九、一五三頁。
- 110 金子信二、註102に同じ、七二頁。
- 111 文政八年（一八二五）に成立した随筆集。滝沢解（曲亭馬琴）が主催した兎園会の記録や、そこで発表された江戸をはじめとする諸国の奇談が収録されている。全十二巻の他に、外集・別集・余録などの九巻がある。
- 112 日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』第二期第二巻、日本随筆大成刊行會、一九二八、二九五～九六頁。
- 本文では「水田八幡宮」とあるが、稚児風流が継承されているのは「水田天満宮」

であるため、ここでは天満宮と記した。

金子信二、註102に同じ、七一頁。

三根町史編さん委員会編、同掲書、一一二八頁。

佐賀県立図書館、註64に同じ、二四三～四四頁。

116 115 114 113  
縮太鼓（鞆鼓）を打つ人のこと。現在は「もりやーし」、「もらいし」などと呼ばれ、縮太鼓を置いて打つ場合と、身に付けて打つ場合がある。

117  
特に天衝舞（玄蕃一流）浮立の伝書には女性ものの帯で飾った傘鉾を用いるといった内容が記されていることが多く、現在も市川为天衝舞浮立では留袖を着せ丸帯を巻いた傘鉾が使用される。

矢俣九洲男『市川のまつり―天衝舞浮立―』市川天衝舞浮立保存会、一九七八、六五～七二頁。

118  
日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』第二期第一巻、日本随筆大成刊行会、一九二八、三三～一五。

119  
年代は不明だが「子三月」に「宇佐宮社人」であった「都渡若狭」という人物によって書かれたものである。祭礼の際に警固を派遣しており、「御代官」「御代参」という文言が見られることから、少なくとも江戸時代の成立かと思われる。

佐賀民俗学会「資料紹介」『佐賀民俗学』六号、佐賀民俗学会、一九八三、五八頁。

120  
前述した通り、当神社は元慶二年（八七八）に創建されたことに始まるとされるが、ここでは現在の鎮座場所である現大宇天建寺に遷座された元和二年（一六一六）を創建として、二五〇年と数えている。

121  
佐賀県立図書館、註64に同じ、七八六～八七頁。